全国シルクのまち情報誌

知・る・く

令和２年３月
No.11

岡谷蚕糸博物館リニューアルオープン５周年記念事業
（ユミカツラ　ファッションショー）

シルクのまちづくり市区町村協議会

情報誌の名称の『知・る・く』は、「シルク」の事を「知る」、「シルク」の街を「歩く」という意味が込められており、３つのフレーズを融合させた造語です。
「知」の「口」部分は絹糸をイメージ。同時にシルクの無限大（∞）の可能性も表現しています。
「く」の下部には靴をあしらい、街を歩くイメージと協議会の前進の意味を込めました。

No.11>>>Contents

●産地ブランドマークのご紹介

（１）岡谷ブランドロゴ　（長野県岡谷市）　…… 1

●会員自治体の情報（シルクに関わるイベントや取り組みなど）

（１）長野県岡谷市　…… 2

（２）京都府宮津市　…… 6

（３）群馬県前橋市　…… 7

《参考資料》

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成員一覧　…… 11

シルクのまちづくり市区町村協議会の設立趣意書　…… 13

産地ブランドマークのご紹介

岡谷ブランドロゴ　（長野県岡谷市）

■ブランドマーク名
岡谷ブランドロゴ
■ブランドマークの説明
ブランドコンセプトに書かれている「美しいものづくりのまち」をイメージし、岡谷の原点である繊細な絹糸によって岡谷の文字が編みこまれ、ここから新しく美しいものづくりが始まるということが意味づけられています。

岡谷蚕糸博物館リニューアルオープン５周年記念事業 報告
― ユミカツラ　ファッションショー ―

はじめに

長野県のほぼ中央、諏訪湖のほとりに位置する岡谷市は、明治初期よりわが国の生糸の一大生産地として発展し、その生糸は海外へ輸出され、海外から”SILK OKAYA”、国内からは「糸都（しと）岡谷」と呼ばれてきました。

当岡谷蚕糸博物館は、江戸時代後期からの製糸器具・機械類や蚕糸史料を収集・保存し、時代的背景に基づき展示するわが国唯一の蚕糸に関する博物館として昭和39年に開館しました。その後、地元はもとより全国から多くの皆様にご来館頂き、わが国の近代化の礎を築いた製糸業の姿と先人の偉業を学び、カイコ、繭に始まりシルク全般に触れることのできる生涯学習の場としてもご利用頂いてきました。

開館50年後の平成26年8月1日、当館は岡谷蚕糸博物館―シルクファクトおかや―としてリニューアルオープンしました。博物館内には、実際に操業している(株)宮坂製糸所を併設し、博物館を見学しながら製糸工場も見学のできるという、わが国で類い稀な博物館として生まれ変わりました。

そして、令和元年8月1日にリニューアルオープン5周年を迎えました。その記念として同年8月1日～9月29日まで、館内で企画展「ユミカツラ　―シルクの魅力とブライダルファッション展―」を開催し、8月21日には岡谷市文化会館カノラホールにて「ユミカツラ ファッションショー」を開催しました。

1.　5周年記念事業の開催にあたって

平成26年9月3日、岡谷蚕糸博物館のリニューアルオープンのこけら落としで、桂由美さんによるファッションショーとブライダルシルクファッション展（企画展）を開催しました。その時多くの皆さんから「感動しました。またやって下さい」という多くの声を頂きました。

今回、5周年記念として、再び桂先生にお願いしたところ、二つ返事で快く引き受けて頂きました。先生からお聞きしたところ、「蚕糸に歴史ある岡谷だから、この地でシルクに関するファッションショーを行う意義があるのです」と言っていただきました。

桂先生は、国内では東京・大阪・名古屋などの大都市や、海外ではパリ・ニューヨークなど中心で行なっていますが、国内の地方でファッションショーを行ったのは、5年前の岡谷での開催と今回の開催の2度しかないとのことでした。大変光栄なことです。

2.　5周年記念事業「ユミカツラ ファッションショー」の開催

1) パネルディスカッション

8月21日、ファッションショーに先立ちパネルディスカッションを行いました。テ

ーマは「日本のシルク文化とその魅力を世界へ！」で、パネラーとして、シルクに長年かかわってこられた桂由美先生、京都在住の友禅作家の千地泰弘先生、文化学園大学名誉教授・医学博士の田村照子先生にお願いしました。

桂先生からは、日本で初めてウェディングドレスを普及させた立場として、次のように述べられました。『和の伝統を活かし、和と洋の融合を図ったデザインをしています。それはロマンティズムを感じさせるもの。そこには品格があり、シルクを纏うことで満足感が得られたものと思っています。シルクは私にとって総てを満足させてくれる素材です。』

千地先生からは、若い時にアメリカで仏教画家の父とともに寺院の大壁画を創作し、その後友禅に魅せられて着物の世界に入ったこと。友禅を通じ、シルクの魅力、日本の絹の文化を世界に発信し続けていることなどについて話されました。

田村先生は、桂先生、千地先生がシルクに対する想いを語って頂く中で、そのシルクの魅力を科学的に説明して頂きました。

異なる分野の３名の先生からのお話で、日本のシルク文化とシルクの魅力を再認識したパネルディスカッションとなりました。

写真１　パネルディスカッションに先立って今井竜五岡谷市長挨拶

2) ユミカツラ ファッションショー

パネルディスカッションでシルクの魅力を十分に語って頂いた後に、ファッションショーを開催しました。ユミカツラのドレスと和装の 36 点と、昨年のパリコレで演出されたものなど、ユミカツラの華やかなシルクの世界が展開されました。

ブライダルの伝道師として、幸せの輪を広げていく桂先生の姿に会場全員が魅了されたひとときでした。

写真２　ユミカツラ　ファッションショー風景

3. 5周年記念企画展の開催

博物館では5周年記念として、企画展「ユミカツラ　―シルクの魅力とブライダルファッション展―」を8月1日から2ヶ月間開催しました。シルクを素材としたウェディングドレス11点、パリコレで披露した新作5点、また桂先生のデザインからウェディングドレスが生まれていく過程の展示もありました。

また、期間中、8月2日にはユミカツラ･アクセサリーデザイナーによるギャラリートーク、8月22日には桂先生のギャラリートークが行われました。

展示作品は、手描き友禅、西陣織、友禅刺繍、つまみ細工など日本の伝統的な絹文化をドレスで表現したものなど、日本文化を表現した作品でした。パリコレの作品は京都の葵祭りをテーマに御所車と洋花を描いたモダンな打掛をガウン風にアレンジしたもので、桂先生らしい和洋を取り入れた斬新なデザインのドレスや着物の展示がありました。

桂先生はギャラリートークの中で「世界的にみると着物への注目度は高くなっています。日本の伝統技術を生かし、これからも着物の魅力を世界に発信していきたい」と述べられました。

写真３　企画展ギャラリートーク

おわりに

ユミカツラファッション一開催当日（8 月 21 日）14 時から、岡谷市役所大会議室に於いて、シルクのまちづくり市区町村協議会の総会が開催されました。その後、皆さんにはユミカツラ ファッションショーをご覧頂きました。翌 22 日には岡谷蚕糸博物館で行われた 5 周年記念式典や桂先生のギャリートークに参加し、桂先生との交流を深めて頂きました。

今回のシルクファションショーには、県内外から約 1,200 名の参加があり、2 ヶ月間の企画展には約 7,500 名にご来館頂き、日本の絹文化とその魅力を岡谷から発信をすることができました。

岡谷蚕糸博物館では、このような活動を今後も企画するなどして、岡谷ならではのシルクによるまちづくりを更に進めて行きたいと思います。

丹後きものまつりin天橋立

令和元年10月20日（日）、20回目を迎える秋の恒例イベント「丹後きものまつり」が天橋立において開催され、市内外から約800人の方々が参加されました。

丹後織物工業組合や行政、地元観光事業者等で構成される実行委員会が、きものを着る機会をつくり、丹後の特産品である「丹後ちりめん」と天橋立観光をＰＲしようと、例年10月に開催しています。

参加者は、松並木を一斉に行進する「きものパレード」のほか、各所に設置された撮影パネルでの写真撮影、スタンプラリー、人力車、野点を楽しまれました。

また、恒例となったファッションショーでは、令和元年に相応しい皇室の袿袴（けいこ）姿の装束の着付け実演を披露されました。

その他、浦嶋太鼓の演舞、日本遺産「丹後ちりめん回廊」の構成文化財である「ちりめん小唄踊り」、丹後ちりめん小物や古着市などを行う「きもの智恵の市」など、各種イベントにより終日賑わいました。

主催　丹後きものまつり実行委員会
（京都府京丹後市大宮町河辺3188番地（丹後織物工業組合内））
TEL 0772－68－5211　FAX 0772－68－5300
MAIL info@tanko.or.jp

シルク・サミットin前橋 vol.2

～スイス・イタリアと藩営前橋製糸所～　開催報告

目的

本市が歴史文化に立脚したまちづくりを始めてから５年が経過し、令和２年（２０２０）は日本で最初の洋式器械製糸・藩営前橋製糸所創業１５０年に当たります。そこで、近代製糸業の発祥の地であり「生糸のまち前橋」の基礎を築いた藩営前橋製糸所とスイス・イタリアとの製糸技術の関係性や指導者ミューラーの実像を紐解きながら、「歴史都市まえばし」におけるシルク遺産の活用策を探ることを目的とした、シンポジウムを開催しました。

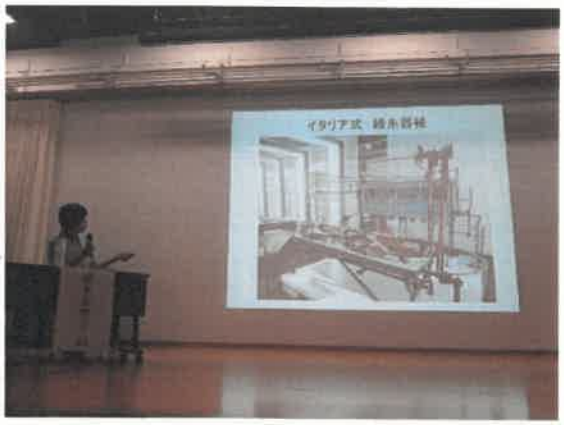
概要

日　時　：令和元年９月７日（土）
　　午後１時３０分～午後３時３０分（開場：１２時３０分）
会　場　：K´BIX元気２１まえばし３階 中央公民館ホール（本町二丁目１２－１）
内　容　：12：30　開場
　　13：30　開会
　　あいさつ　前橋市長　山本　龍
　　13：35　シンポジウム
　　テーマ　①フランス式とイタリア式の生糸の抱合装置
　　②ミューラーの人物像に迫る
　　③ミューラーが指導した製糸器械の３D化

　　パネラー・速水堅曹研究会代表 生糸のまち前橋発信事業委員
　　速水　美智子
　　・東京大学大学院教授　鈴木　淳
　　・大阪芸術大学教授　石井　元章
　　・東京農工大学科学博物館 特任助教・学芸員
　　齊藤　有里加
　　コーディネーター
　　・前橋学センター長　手島　仁

　　15：30　終了
主　催　：前橋市
後　援　：前橋市教育委員会、一般財団法人ぐんま食と歴史文化財団
来場者数：約２００名

会場の様子



官営富岡製糸場で採用されたフランス式と藩営前橋製糸所で採用された
イタリア式の生糸の抱合装置について

（左から）手島仁、清水美智子氏、齊藤有里加氏、鈴木淳氏、石井元章氏

シンポジウムで明らかになったこと

① フランス式とイタリア式の生糸の抱合装置について

明治３年に前橋製糸所開設時の指導者、スイス人ミューラーが伝えた生糸抱合装置はイタリア式（ケンネル式）、明治５年に富岡製糸場開設時にフランス人のブリュナが伝えたものはフランス式（共撚式）と言われてきた。

しかし、調査の結果、フランス式と呼ばれたものもイタリアで製造されたものがフランスに伝わり、それをブリュナが日本に伝えたものであることが、改めて確認できた。

そこで、今後はイタリア式と呼ばれていたものを「前橋型」、フランス式と呼ばれていたものを「富岡型」、折衷式を「諏訪型」、名取雅樹が考案したものを「甲府型」と呼称したらどうか、その方がより地域に即した日本の製糸業の多様な歴史が描けると思われる、と提案がなされた。

② ミューラーの人物像について

藩営前橋製糸所の指導者のミューラーは、ジュネーブ生まれのスイス人で、１２年間、イタリアで製糸業に従事してきたと言われてきた。調査の結果、兄がイタリアで製糸業を営み、ミューラーは弟と生糸と蚕種を買い付けるために明治２年に来日。その後、前橋藩と契約し、明治３年６月に藩営前橋製糸所、同４年８月には小野組の築地製糸所、同５年は東京赤坂に工部省の葵町製糸場を、それぞれ開業した。スイス人は北イタリアに進出し、製糸業を営んでいた。スイスと北イタリアは一帯にとらえるべきであると指摘がなされた。

ミューラーの追跡調査を試みたが、在日スイス大使館には個人情報ということで協力を得られなかった。前橋市としては、ブリュナと並ぶ、あるいはそれ以上の貢献をしたミューラーについてその人物像を詳細に解明したい為、スイスについて詳しい方の協力を得たいと訴えがなされた。

ミューラーは７年間の滞在中に、日本に藩営、民間、官営の３つの器械製糸場を作っているが、残念ながら、いずれの製糸工場も現在残っていない。

③ ミューラーが指導した製糸器械の３Ｄ化

葵町製糸所の図面が東京農工大学科学博物館で発見された。同大学ではプロジェクトチームを編成し、図面を読み取り、３Ｄ化を進めている。その進捗状況を報告していただいた。完成すれば、ミューラーが指導した器械の復元が可能となる。

藩営前橋製糸所は外観写真が残っている。器械の復元ができれば、藩営前橋製糸所の復元が可能となる。

ぜひ、復元して、岡谷市、豊橋市とならぶ日本を代表する三大製糸都市といわれた前橋市のシンボルにしたい。

④ 前橋学ブックレットに

２０２０年は藩営前橋製糸所創業１５０年に当たる。第１回シルクサミットでの差波亜紀子氏に講演「藩営前橋製糸所にかかわった商人―勝山宗三郎と小野組を中心に―」が６月に前橋学ブックレット２２号として刊行を予定している。また、今回のシンポジウムもブックレットにして刊行する予定である。

【前橋学ブックレットとは】

前橋の誇れる先人、埋もれた歴史等を全国に発信するために平成２７年度より刊行。（Ｒ２年２月現在２１号）

新聞記事

日本最初の洋式機械製糸場
前橋製糸所埋もれた歴史に光

前橋に日本最初の洋式機械製糸場があった――。建物が残っていないために、存在があまり知られていない「前橋製糸所」。その歴史を形に残そうと、関係者が取り組みを続けている。

現在の前橋市岩神町にあった前橋製糸所。小規模で木造だったという＝宮内庁書陵部提供

木造で小規模だった前橋製糸所は当時、全国から視察が相次ぎ活気があったという。前橋の近代史に詳しい前橋学センター長の手島仁さんは「技術の全国普及の原点であり、現在の中小企業のモデルになった」と評価する。

来月7日 シルク・サミット

手島さんの説明では、前橋製糸所は前橋藩によって、世界文化遺産の富岡製糸場より2年早い1870（明治3）年に誕生した。現在の前橋市住吉町で試験操業した後、岩神町に移ったという。富岡製糸場が大規模工場向きのフランス式であるのに対して、前橋製糸所は小規模向きのイタリア式で、指導者はスイス人のミューラーだった。

手島さんは前橋市の事業で、調査して記録化する取り組みを続ける。2015年度ごろから継続的に講演会などを開き、内容を本「前橋学ブックレット」にまとめる。知られていないミューラーの研究も続ける。

ミューラーが作った製糸機はいずれも現存しないが、現在の東京・虎ノ門付近に作った築地製糸場の図面が東京農工大科学博物館で発見された。現在、同大で3Dデジタル画像化して復元する取り組みも進む。

来年は前橋製糸所が誕生して150年にあたり、手島さんは「機械を復元して展示し、まちづくりの新しい資源にしたい」と話す。

9月7日には、前橋製糸所の責任者だった速水堅曹の子孫の速水美智子さんや、図面の3D化に取り組む東京農工大科学博物館の特任助教・学芸員の斉藤有里加さんらが語り合う「シルク・サミット」がある。コーディネーターは手島さん。会場は前橋市本町2丁目の前橋プラザ元気21で、午後1時半から。定員400人。無料。申し込みは市文化国際課（027・898・6992）。（[illegible]）

朝日新聞（令和元年８月20日掲

生糸普及に貢献 前橋製糸所
中小企業の原点発信

2020年6月に創業150年を迎える藩営前橋製糸所（[illegible]）について、前橋市は製糸技術の改良を重ねて全国に普及させた功績を、日本のものづくりを支える中小企業の原点として売り出す。東京農工大と協力し、当時の生糸の抱合装置の3D映像化と復元に取り組む。今年9月にはプレイベントとして最新の研究成果を報告、日本の近代化に貢献した生糸のまちをPRし、東京五輪・パラリンピックに向けた観光客誘致にしたい考えだ。

東京農工大と前橋市が連携 3D映像で装置復元

藩営前橋製糸所 官営富岡製糸場より2年早い1870（明治3）年6月、前橋市住吉町の民家で試験的に操業し、9月に岩神町へと移転して正式に創業した。日本で最初の洋式器械製糸工場。全国から伝習生を受け入れ、日本の近代化を担った。

富岡製糸場が世界遺産として知られる一方、国の[illegible]を受けた同製糸場は生糸の大量生産に大規模工場向きのフランス式を採用したため、[illegible]にはできなかった。

一方、前橋製糸所は、小規模工場に向いた「イタリア式」の装置を採用。全国から伝習生を受け入れ、器械製糸技術を普及させた。市は、中小企業のモデルとして日本の近代化に貢献した歴史的価値とストーリーを発信し、新たな観光資源にする。ただ、建物が残っていないため、市民にも忘れられた存在になっているのが課題だ。

前橋製糸所を指導したスイス人技師が同時期に手掛けた築町製糸場（東京・虎ノ門付近）の図面が、東京農工大科学博物館（東京都小金井市）で見つかっており、同大がクラウドファンディングで資金を募り3D映像化を進めている。市は150周年に向け、この映像などから装置を復元し、動態展示を目指す。建物の写真も残されており、可視化することで[illegible]を本格化する。

今年9月7日には、シルク・サミットを開催する。シンポジウムは、前橋製糸所の責任者だった速水堅曹の子孫、速水美智子さんや東京大大学院の鈴木淳教授らが出席。製糸所とスイスやイタリアとの関係について最新の研究成果を発表し、インバウンド（訪日外国人客）に生かすための地ならしをしたい考えだ。

明治初期に全国から訪れた伝習生は前橋製糸所と富岡製糸場の両方を視察して、経営で工夫を重ねたことを踏まえ、市文化国際課は「外国人も[illegible]で歴史体験してもらい、本県観光の魅力向上に貢献したい」としている。

上毛新聞(令和元年８月21日掲載)

前橋製糸所150年控えサミット
伊、スイスとの関係 最新研究で新たな価値

2020年に藩営前橋製糸所が創業150年を迎えるプレイベントとして「シルク・サミットin前橋vol.2」（前橋市主催）が7日、市中央公民館で開かれた。市民ら約200人が参加した。シンポジウムは同製糸所の責任者だった速水堅曹の子孫の速水美智子さん、東京大大学院教授の鈴木淳さんら4人が登壇。同製糸所とスイス、イタリア両国との関係について最新の研究成果などを踏まえて意見を交わした。

前橋製糸所の抱合装置の研究などについて意見を交わしたシンポジウム

パネリストはほかに、岡谷市出身で大阪芸術大教授の石井元章さん、東京農工大科学博物館特任助教・学芸員の斉藤有里加さん。コーディネーターを前橋学センター長の手島仁さんが務めた。

速水さんは生糸のまち前橋発信事業委員として昨年、イタリアで行った調査研究を発表した。国内では一般的に、富岡製糸場が導入した生糸の抱合装置を「フランス式」、前橋製糸所が採用した装置を「イタリア式」と呼んできたが、富岡の装置も北イタリアが発祥だと指摘した。

前橋製糸所を指導したスイス人のカスパー・ミュラーは、イタリアで生糸や蚕種の買い付け業をしていた[illegible]に横浜へ派遣されていたことも明らかにした。

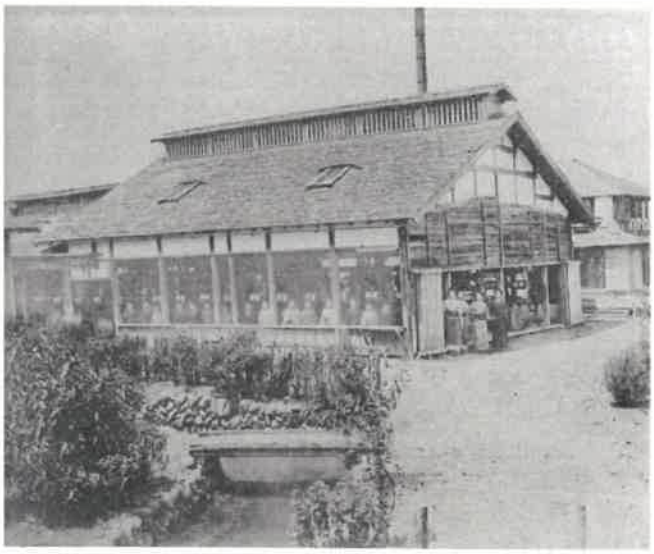
手島さんが「イタリア式を前橋型、フランス式を富岡型、折衷式を[illegible]型と呼べば、地域に即した歴史が描けるのではないか」と提案。鈴木さんは「前橋に倣ったケースが多く、前橋を強調する手はある。どの部分を取り入れたかをはっきりさせるのが大事」と応じた。

石井さんはスイスと北イタリアの関係、斉藤さんはミューラーが指導した築町製糸所の抱合装置の3D映像化の進捗を説明した。

シンポジウムに先立つあいさつで、山本龍市長は「前橋の今の礎を作ったのが藩営前橋製糸所。できれば復元に挑戦していきたい」と述べた。

【おことわり】連載「[illegible]の謎」は休みました。

上毛新聞(令和元年９月８日掲載)



藩営前橋製糸所
（宮内庁書陵部提供）

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成団体等一覧

（令和元年８月２１日現在）

■会員（３２団体）

1	山形県鶴岡市	12	新潟県十日町市	23	滋賀県長浜市
2	山形県長井市	13	新潟県小千谷市	24	京都府京都市
3	山形県白鷹町	14	新潟県南魚沼市	25	京都府宮津市
4	福島県川俣町	15	石川県金沢市	26	京都府京丹後市
5	茨城県結城市	16	石川県小松市	27	京都府与謝野町
6	栃木県足利市	17	福井県勝山市	28	愛媛県西予市
7	栃木県小山市	18	山梨県富士吉田市	29	鹿児島県鹿児島市
8	群馬県富岡市	19	山梨県西桂町	30	鹿児島県奄美市
9	群馬県前橋市	20	長野県岡谷市	31	鹿児島県龍郷町
10	東京都新宿区	21	長野県駒ヶ根市	32	沖縄県久米島町
11	東京都武蔵村山市	22	長野県安曇野市		

◇役員

会　長　長野県岡谷市（市長　今井 竜五）
副会長　愛媛県西予市、茨城県結城市、滋賀県長浜市
監　事　新潟県十日町市、山形県鶴岡市

■特別会員[オブザーバー]

農林水産省、経済産業省関係部署担当課長

■事務局サポート

ＮＰＯ法人日本染織文化振興会

■顧問（１１名）

◎ファッションジャーナリスト

清水　早苗氏　　ジャーナリスト／クリエイティブ・ディレクター

◎クリエーションコーディネーター

松田　正夫氏　　繊維・未来塾 塾長／（株）大阪繊維リソースセンター特任顧問
岡田　茂樹氏　　元東京ファッションデザイナー協会議長／元鶴岡 kibiso プロデューサー

◎テキスタイルデザイナー

須藤　玲子氏　　株式会社布取締役
酒井　美和子氏　　（有）ＧＢカンパニー代表取締役
福井　健二氏　　K.FUKUI PERSONAL OFFICE&EA 主宰
永森　達昌氏　　オフィス・ナガモリ代表

◎和装

早坂　伊織氏　　着物伝承家
笹島　寿美氏　　着装コーディネーター・帯文化研究家

◎研究機関

玉田　靖氏　　信州大学　繊維学部　教授
長島　孝行氏　　東京農業大学　農学部デザイン農学科　教授（農学博士）
藤井　浩司氏　　早稲田大学　政治経済学術院政治経済学部／政治学研究科　教授
阿部　栄子氏　　大妻女子大学　家政学部被服学科　学科長／教授（学術博士）

■協賛者等（２４団体）

◎蚕糸団体

（一財）大日本蚕糸会、中央蚕糸協会、碓氷製糸株式会社、蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会

◎産地織物組合

鶴岡織物工業協同組合、福島県絹人繊織物構造改善工業組合、小千谷織物同業協同組合、山梨県絹人繊織物工業組合、滋賀県絹人繊織物工業組合、丹後織物工業組合、本場大島紬織物協同組合、本場奄美大島紬協同組合

◎絹業団体

全国染色協同組合連合会、全国染織連合会、京友禅協同組合連合会、京都工芸染匠協同組合、日本織物中央卸商業組合連合会、（一社）全日本きもの振興会、（公社）全日本きものコンサルタント協会、（一財）シルクセンター国際貿易観光会館（シルク博物館）、東京ネクタイ協同組合、日本繊維輸入組合、新宿区染色協議会

◎その他団体

GS 世代研究会

シルクのまちづくり市区町村協議会の設立趣旨

古来よりわが国に伝わる尊い宝、絹。

絹を用いる産業、すなわちシルク産業は、地域経済の中で重要な役割を果たし、地域の生活や風土に根付いた産業として我々の地域とともに発展してきました。同時に、悠久の歴史の中でこれら産業が培った技術により生み出される製品は、地域文化を育むと同時に、わが国文化の根幹に大きく関わり、地域の価値や日本の品格を伝えるものとして、産業・文化の両面で貢献しています。

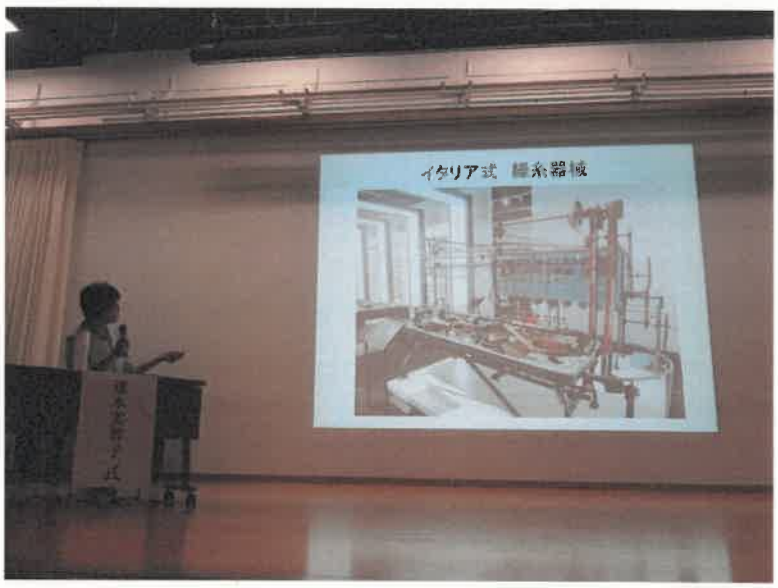
ところが、社会・生活環境が急激に変化する中で、現在では資源の枯渇化や人材の不足、市場の縮小による需要減少など、地域のシルク産業の発展に支障が生じているとともに、近代化・平準化の中でわが国固有の誇りある文化の風化が危惧されているところです。

一般的に、シルク製品は、養蚕、製糸、織物、染色など多段階の工程の中で、それぞれに長年にわたって極められた究極の技術が、完璧なまでに調和され完成されます。またそのものづくりは、技術者同士の厚い信頼と連携の上に成り立ち、日本が誇るものづくりの原点ともなっています。さらに、世界においてもシルクは、かつてシルクロードという長大な交易ルートを創造し、産業を活性化するとともに東西文化の交流を育んできています。すなわちシルクは、単なる繊維素材ではなく、歴史的にも経済社会の様々な断面を相互に発展に導く共通のきずなであり、今後においてもシルクを通じた「連携」「国際展開」「産業活性化」「文化交流」などによって、様々な分野の未来に多くの示唆と可能性を与えてくれるものであると確信します。

こうしたシルクの持つ意味を改めて認識し、シルクに関連する産業、またはシルクに関係する歴史・文化を持つ市区町村が連携し、「シルク産業の活性化」や「シルク文化を活用した魅力ある地域づくり」など、シルクの意味を活用して新たな展望を切り開くため、「シルクのまちづくり市区町村協議会」を設立します。

平成２２年１月２６日

丹後きものまつり in 天橋立（京都府宮津市）



シルク・サミット in 前橋 vol.2（群馬県前橋市）

編集／発行　　シルクのまちづくり市区町村協議会
発行年月　　令和２年３月

【この情報誌に関するお問い合わせ先】
令和元年度 シルクのまちづくり市区町村協議会事務局
（長野県岡谷市産業振興部ブランド推進室）
〒394-0021　長野県岡谷市郷田一丁目４番８号
電　話：0266-23-3489　ＦＡＸ：0266-22-3675
メール：brand@city.okaya.lg.jp
ホームページ：https://silktown.jimdo.com/